

公開講演会

私の北米仏教学三十年

— 囲みを破って生きる —¹⁾

飯 田 昭太郎

只今平井副学長が御紹介下さいましたように、駒大とUBCの姉妹校の御縁を深める為に、この講演の機会を与えて頂きました所、かくも多数おいで頂きまして誠に光栄でございます。私は北米において、いつも新しい聴衆にお話しする時には、次のような枕をもって始めます。即ちもう三十年も前になるでしょうか、私が初めて北米のペンシルバニアへ参りまして、小さなカレッジで初めて英語のスピーチをやりました。初めてでありますので心配していましたら、私の十分の話の後にご婦人が参りまして、“Mr. Iida. I enjoyed your talk very much,” (あなたの話しは大変面白かった) と言われたので、私は大変喜んでまた私の話しのどこが面白かったのかとこう聞きましたら、そのマダムの日く「本当に今の今まで日本語と英語がこんなに似ているとは思わなかった」と……。

即ちそのご婦人は私が英語ではなくて、日本語を話していたと錯覚 (あるいは正確かもしれませんが) されたわけでございます。

そのように物事はリズムというのが一番大事でございまして、私が今から仏教の話しをするのでありますけれども、ここにキリスト教のリズムと仏教のリズムとそのリズムの違いがよく分かれば、私の話しがよく分かることであります。そのリズムがよく分からないと今から私の話す話は分からない……と、いつもこういう枕をもって話すのであります。実はそのジョークは実話ではございません。創作であります。しかし残念ながら、それが創作であろうと疑われた人は今まで一人もおりません。私の英語を聞きますとそれがもう実話以外にはあり得ないと、皆さんが確信されるようなわけです。しかも、こうして何年間もそのジョークを言っておりますと私自身が、それが実話なのか創作なのか今は自分でも分からなくなってきております。ということを申しますのはやはりリズムが大事で、

カナダの『自己主張と対決』のリズムと日本の『一応へりくだる』リズムと大部違いますので、私のこれから申し上げる話のリズムが少しはしゃぎすぎたり、あるいはハッスルしすぎたりして、ちょっと日本式の講演とチャンネルが合わないかもしれません。それを心配したものですから、こうして初めてマッキントッシュのコンピューターを使いまして、講演の草稿を用意しお配りしたのであります。半分はバンクーバーの私の研究室でやりまして、半分は東京に来てすませようと思いましたが、IBMpc はありますが、なかなかマッキントッシュプラスがなくて困っておりました。ところが、これもバンクーバーUBCの即ちブリティッシュコロンビア大学の私の同僚の高島教授が東大の東洋文化研究所に2年ほど客員教授として来ておりましたので、彼がマッキントッシュプラスを担いで来ておりましたので、夜、彼の研究室にお邪魔しまして、残りの半分のタイプしたわけですので誤りが多いかと思いますが其点は御寛容の程お願い申し上げます。

それにしても、日本語で講演出来ることは何と心の安まることでしょうか。もう『二十年』も英語で講義して生活しているのですが、『自他』共に御苦労なことです。

(さて、前置きはこれ位にしてテキストにまいりますが。)

1. 挨拶

〈日本一の仏教学部に〉これは学部長就任直後、私の問(挨拶)〈登竜の意、如何?〉に対する平井俊栄博士の答え(挨拶)でした。

(挨拶というのは、実は禅語から来ているということを精しく説明するだけでも、カナダにおいてはちょっとした講義になりまして、最近日本語教育が非常に盛んでありますが、その日本語の挨拶が禅から来ていることをご存じの日本文学の専攻の学者はあまりいないのです。)誠に遙か、カナダで、駒沢大学仏教学研究紀要及び論集と駒沢大学大学院仏教学年報の質量共に優れた論文によって、絶えず啓発されている私であれば、仏教学の新資料や意解釈、又は学会相手の論争の震源地、駒沢の諸竜象を前にしては、寅年生まれ『バンクーバーの一匹狼』との異名のある私も、恥ずかしながら屠場の囲いの中の『一匹羊』の様に震えているのです。(本当に震えております。)

さて、この囲みを破って生き延びるためには、所謂 satya-kriyā、パーリでは

sacca-kriyā と申しますが²⁾、良きにしろ悪しきにつけありのままをそのまま行え、そうするとそこに adhiṣṭhāna（加護）が働いて、その囲みを破るわけでありませう。こういうインドの古いしきたりで、これはインドだけでなくスコットランドそれからアイルランドにもそういうようなしきたりがあるのです。satya-kriyā 即ちありのままに述べる以外には、名手は無いので、只その為に、私の悪戦苦闘の状況を報告させて頂き、ご高教を賜りたいのです。又、その時の呪文は何時も、（マハートマ・ガンジーが断食をした時にいつも、このバガバットギーターの句を唱えていたのであります。）

कर्मण्येवाधिकारस्ते मा फलेषु कदाचन ।

मा कर्मफलहेतुर्भूर्मा ते सङ्गोऽस्त्वकर्मणि ॥ ४७

辻直四郎博士は

「汝の関心をただ行作のみあらしめよ。

決して {その} 結果にあらしむるなかれ。

行作の結果を動機にたらし無るなかれ。

{されど} 汝は無作 {akarman} にも執着するなかれ、(47)」と、

niṣkrama-karman の秘密を訳されましたが、一言で言えば、只管打坐の只管なので、囲みを破ろうと、じたばたする事さえもいけないので、無所得空、只ひたすらに

jñāna-yoga の為、私の dharma を遂行すべきなのです。以上の naya（実践原理）によって私の北米仏教学30年を述べる前に、その背景としての北米と日本の大学を対照して描く必要があります。

2. 日米大学の差は、天国と地獄

この疑問は、千栄子＝ムルハーン、イリノイ大学教授によって出されたのですが（中央公論、6、1988）これは大学だけの比較ではなくして、底辺である社会の構造の反映であり、どの社会にも天国と地獄があっても、共通項と異類項の区別の問題なのです。

例えば、日本は、`入り難くして、住みやすし、北米は、`入り易くして、住みにくし、といえます。すなわち、お互いに厳しい評価世界で、`no 甘え、no まあまあ、の世界で、学期末に学生から遠慮会釈なく採点される地獄から這い上がった私には、日本の教授は五衰は必然でしょうが天人に見えるのです。また北

米は、〔これはこれ、それはそれ〕の社会で、〔これは、こうだが……〕ということはありません。勿論、地獄一定と覚悟すれば何でもありません。しかし、確かに〔アメリカの教授生活は永続的頭脳労働の自転車操業〕なので、倒産すれば、^レほんまにあかんのや、^レでして、助けてくれる^レ恩師、もボスもないのです。

広々としたキャンパスの芝生は、学生も教授には、〔一匹狼の自転車操業のグラウンド〕で、それこそ一所懸命なのです。この厳しさが生来怠惰な私をして研究に駆り立たしている事は間違いありません。

テニユアー（終身雇用契約）が取られるまでには、学会で認められた著書が、多くの論文の外に1冊は必要で、正教授は2, 3冊は最低限度、要求されるのですから。著書なしの正教授は例外です。千栄子＝ムルハーン教授の例を見ても〔東洋学科に同時就任した6人のうち、5人が消えていった〕そうで、研究と講義の両方からふるいにかけてられるので、私の経験としても、この確率なのです。私の場合はその上にイングリッシュスピーキングの難関が控えているのです。論文はなんとか書いても、発音はその場の待った無しの勝負ですから……。竹下（元）総理は、〔自分の高校英語教師の学生に同情してやってくれ〕とジョークに出来ますが、私の場合は生活が直ちにかかってくるのですから。仏教のコースは別に必修ではないので話が通じなければ学生は来なく、エンロールメントが低ければ、契約破棄の一因になるのです。この囲みをいかに破ったか？ それだけでも長い話になりますので、次に急ぐことにします。

さて、津田真一博士の（大法輪 9, 1988）

A. 仏教と言う一つの思想に関する事実の学

B. 思想としての仏教の学

C. 実践哲学としての仏教学

との、分類に従って述べましょう。但し、私は単に分類に従っているだけで、^レ敢て極端な言い方をすれば、仏教という思想を今日の誤りに導いた契機は、この竜樹のお陰で、仏教は空の立場で、有をいうのは外道だとか大乘の流れは有と無の2つあって、有の立場は如来蔵思想で、それは仏教じゃないとか、今日の諸々の愚論が出てきているわけです。最もこれは必ずしも竜樹だけの罪ではありませんが……（p25）^レと言う^レ極端な、説に賛成しているのではないことは勿論です。

A. 仏教と言う一つの思想に関する事実の学

もう30年の昔1959年の9月、故 Richard Robinson 博士によって、北米で最初の仏教学博士課程の設けられた Wisconsin 大学に入学した私は、³30にして学に志した、のです。翌年、故 Edward Conze 博士が来講され、⁴図書館の主、としてカタログされていない Buddhist Thought of India と Prajñāpāramitā Literature を、地下室の一隅に見つけ、⁵般若経の三性説如何？、³との私の質問（挨）に対して、驚きと喜びの反応（拶）を示されたのです。と申しますのは、山口益博士の「仏教に於ける有と無の対論」を下敷きとして Bhāvaviveka の中観心論、第五章、唯識説批判のサンスクリット原文校訂と英訳を私の博士論文にするという身に過ぎた野望を抱いて居たからです。問題は所謂、二万五千頌般若の弥勒請問章で山口博士は、Obermiller も注意しているが、⁶専門的な攻究を待たねばならぬのかも知れない、（p153）と述べていられたからです。般若経の世界的権威 Conze 博士でさえも未知の事実であり、サンスクリット原文を苦心して、入手の上、解説を私のゼミのテーマにされたのです。さて、それからというもの、⁷寝ては夢、起きては現つ・盆も正月もあらばこそ、クリスマスもなしに解読に勤めました。何しろ a, ā, u, ū も皆目見当がつかず、ただ、あー、あーと、溜息をつくばかりなので、漢訳には勿論、この章はある筈はなく、チベット大蔵経も図書館に無かったのですから。⁸to make a long story short、1968年パリを訪れたとき、ソルボンヌの前の出版社で、この校訂文が載った Renou 記念論文集を著者割引で買った喜びは終生忘れられません⁴、しかしこの論文は苦勞したわりには、学会の注意をひきませんでした。袴谷教授によって和訳され⁵、最近、長尾博士の *magum opus* 「撰大乘論和訳と注解⁶」の中において数ページを費やして論じて頂いていることは、望外の光栄であります。また A.Wayman 博士の Srāvakabhūmi ⁷も出版されて、マニスクリプト校訂から研究を始める醍醐味を知ったのです。と同時に、フランス語の試験、哲学科のマスターコース資格（これは専攻分野の基礎を広げると共に、就職のとき有利な条件を作る為）、1週間にわたる梵蔵漢巴の語学試験、仏教の歴史と教理等の試験をすませたのは、1965年、6月のことでした。

ただちに家族と共に American Institute of Indian Studies の研究員として、バンクーバー、日本経由インドにむかったのです。途中 U B C の Dr.Arthur Link を尋ね、彼の「梁の高僧伝」の英訳を三日三晩かかって読破し10数ページのコメントを書いたのが、私と U . B . C . , リンク先生及び高僧伝とのご縁の

始まりでした。その後、大著、「中国般若思想史研究」⁸⁾を片手に世界一周研究旅行をされた平井博士がリンク教授に面会されたご縁もあいまって、1981年に不慮の死にあわれた教授の遺稿を駒沢—UBC姉妹校提携を記念して、平井ゼミの努力によって数冊にわたって刊行される運びになった事は、教授も草葉の影からお喜びの事と思います。

さて、10年目の日本は、新幹線が開通し、三等の切符を買おうとして今浦島と笑われました。ニューデリーに行きデリー大学、仏教学科、科長室にゴーカレー教授を尋ね〔中観心論第五章（唯識説批判）八偈は、na（～でない）か naḥ（我々にとっては）か？〕との私の〔挨〕拶に、破顔一笑、naḥ だと即答されたのです。これで論理至上主義といわれた、Bhāvaviveka の経証に対する態度が明確になり、山口博士の、〔如来の一切の教言は我等の量にあらず〕は、〔量である〕と肯定に訂正せねばならないことになり、Bhāvaviveka の三性説の解釈が新たに考究される端緒になったわけです。しかし、大谷大学出身の菊池法純氏が第五章を博士論文にすべくゼミで読んでいる最中との事、奈落の底に落ちた気がしたのです。しかし、Karmaṇyeva とインド—パキスタン第一次戦争の中をゼミにでたのです。菊池氏に絶対に不可能といわれた第三章のマニスクプリトをゴーカレー教授から頂き、それこそ、天にも昇る心地でヒマラヤの麓のインドのチベット、ダラムサーラに行ったのです。そして〔Mādhyamika の三性説について〕ダライラマとの法論（Maitreya Chapter と、Legs bshad snying po を中心として）ご挨拶とした若き日の一日はヒマラヤの夢のようです。サンスクリット校訂に日に夜をついで雨季を過ごし気分と体力の限界に一人で挑戦と病院にかつきこまれたりしましたが、其後の私の研究の方向を規定するものとして得難い経験でした。何故なら、マックス・ウエーバーも「或る写本の或る箇所正しい解釈をうる」に夢中になるというようなことの出来ない人は、先づ学問には縁遠い人々である。」と云っているからです。また梵文校訂中痛切に感じたこの校訂の秘訣は、〔原文を校正し訂正すべきだが、変え過ぎると長い注記を必要とするのみか、誤りが多い〕と言うことで、これは今でも私の education principle(naya)でもあるのです。すなわち、学生一人一人の持ち味を〔正しく活かす〕ことなのです。即ちゼネレーションギャップどころか人種的、言語的ギャップのある学生を教育する等という大それたが、如何に仕事とはいえどうして出来るのだろうか？ と不安と疑問に怖れをなしたのですが、夫々の学生諸君が、マニスクリプ

トの様に唯一して価値あるものを具えている——しかし其儘では社会に通用しないので、しかるべきプロセスを通じて持味を生かし、誤りは直し、不足な所は補足されねばならず、コンサルタントとしてのヘルプをするのが自分の役目なのだと悟りまして、10数人の Ph.D 取得者と研究を続けて来たのです。具体的な成果として、その一人、Ms. Anne Macdonald が、この6月の卒業式に、カナダ総督の金賞をUBCの代表（200人の修士の）として受領したばかりで私の方法が社会的にも認められたのです⁹⁾。

さて、Bhāvaviveka の自注であるとされている思枳炎に、〔ここで師いわく〕と20箇所ちかくもあり、江島博士の説もありますが、この師は誰なのか？ 私の未だに疑問とする所です。袴谷教授は今演習でのこの書を読んでおられますが、先生の御意見をお聞きしたいものです。般若経に三性説らしきものが出ている歴史的背景は？ 般若経と仏教における新説との関係は？ 疑問と興味は深々として尽きないのです。ちなみに、第五章はその後ネパールのカトマンズの日本人大使館に外交官となられた菊池氏を尋ねサンスクリット校訂文と英訳の原稿を頂き参考にさせてもらい、菊池氏による出版をまっていたましたが、そのうちデンマークの Lindtner 博士と Eckel が菊池氏の校訂文と英訳に手を入れていた私の原稿をもとにして、それぞれ原文校訂と英訳を準備中で、完成の暁には3人で出版する約束でした。ところが、Lindtnerは最近、中国からサンスクリットのマニスクリプトを入手され校訂し、Malcom David Eckel(Harvard Univ.) 博士が英訳して Iida 抜きで出版すると、2年前にバンクーバーで告げられた夜は、#16 For those whose souls are disturbed by day by various notions of sense objects the terriblepoison of vāsanā due to their influence is at least as vehement in a dream.、との Lindtner が校訂した kambala の *Ālokamālā*¹⁰⁾の一説をそのまま夢を見たことを彼に告げ、ユーモアと皮肉を混ぜて交渉して、ようやく私が概説をつけてデンマークから出版することに決めたのです¹¹⁾。まことに、厳しい義理も人情もない仏教学のオリンピックと言えそうです。かくして私の博士論文として、第五章に目をつけ、以来もう23年の星霜が流れてしまいました。

また、般若経の三性説の研究は、長安で名を成した学僧、円測（613～696）に巡り会うことになったのです¹²⁾。彼を〔えんそく〕と読むでは、一遍に素人であることを告白することになります。何故なのでしょう。韓国語で Wón ch'uk と呼ぶのと関係があるのでしょうか。お教え願います。それは兎も角、慈恩

大師さえも気がついていない Maitreya-Chapter を円測が問題として取り上げ、深く論及しており、その論旨がツオンカパに大なる影響を与えているのです。しかも漢訳されなかった『中観心論』の偈を引いているのです。

中観心論入真甘露品言、離六識外 無別阿頼耶識 眼等六識所不攝故 猶如空華故如彼宗唯立六識（解深密經疏，第三）。

まことに、円測の原典に肉迫する学問的方法には、頭が下がる思いがするのです。

現在、西安の郊外、興教寺に玄奘、窺基そして円測の塔が残っているのですから、彼の唐代仏教史上における正当な地位は大書されるべきです。しかし、彼の名が、スタンレイワインシュタイン博士の近著 *Buddhism Under the T'ang* にも、シカゴ大学から出た *Encyclopedia of Religion* にも出ていないことは大きなミスであります。「唐代の仏教」は「中国・日本の文献を網羅した、仏教に対するインペリアル・ポリシーの歴史的サーベイとして秀れたものである」と、と、UBCのオーバーマイヤー博士も賞賛していますが、同時に彼の短い書評の約1/3を費して、「唐代の仏教の文化的、社会的な諸要素は論じられていなく、この研究が仏教とステートとの関係を十分に論じているともいえない」と断じてもいます¹³⁾。「仏教思想を理解するにはいつもその歴史的背景或いは政治との関わり合いを考慮しなければならない……つまり、文学・芸術・哲学・その他の宗教からの影響もある筈です。言い換えれば、仏教は一種の孤立した現象ではありません。¹⁴⁾」との結城令聞先生の言葉を肝に銘じている著者としては、*Buddhist“Church”under the T'ang* ならともかく、*Buddhism under the T'ang* は、仏教だけでなく中国文化の黄金時代の唐代の仏教を扱ったものとしては少し「針小棒大」であると思います。

さて私は北米で Bhāvaviveka Studies に先鞭を付けた様に Wón-ch'uk (円測) 研究のパイオニアである事を嬉しく思っています。何時迄たってもエトランゼとして無いとは云えない偏見と戦い乍ら、仏教学で生きている自分の情念を批判的に円測の上に投影させ、文献上の記録を自伝でさえも絶対的な史料としないと同時に、その反面、典拠がなく一見史料的には無価値の様に見えてもそれを虚構と直ちにきめつけず、後代に言われ事でも再吟味して¹⁵⁾、少しでも円測の実像を浮上させたいものです。例えば、『続高僧伝』の円測の門番買取説をワインシュタインは、虚構であると、きめつけるのですが¹⁶⁾、私は、よしそれが虚構にせ

よ、円仁が都を離れた太原にても、それを風聞しているのは向故かと問いたいの
です。

もしそれが、偏計されたものであれば、その根拠、依他起性は何か？ と問い
たいのです。即ち、まことしやかな真実らしきものを一皮はぐと虚妄なものが現
れ、一見虚妄とみられるもの、底に真実が往々にして秘められているのです。文
献的には慧沼の了義燈が円測を批判しているのを学ぶと共に、普寂の成唯識論略
疏のいう、「西明等、甚だ道理あり」という事情をも明かにしたいのです。その
ために、申賢淑教授（東国大）の駒大博士論文の「円測の研究」、又、日本にお
ける円測法師評価についての太田久紀教授の労作に導かれて研究の牛歩を進めて
います。カナダから日本に参りましてさっそく映画「敦煌」を観ましたが、私の
円測の本のタイトルもシルクロードのロマンを感じさせる The Three Stūpas
of Ch'ang-an（中央に玄奘、右に窺基、左に円測の塔が有りまして）
「On the o-
utskirts of Hsi-an, the capital city of Shanhsi province and industrial city of
the people's Republic of China, three stūpas stand in Hsing-chiao temple、
と始め

「Thus as I read the above story about these three stūpas in Ch'ang—An, I
think we should be grateful to those who built and maintained the stūpas, w-
hich contain an inside picture of the learned society of T'ang China, with all
its gloom and glory、と終わる予定です。驚くべきことは、仏教学の先端的研究
をするにあたって、資料は勿論、現に斯界の第1人者はすべてお世辞ではなくこ
の駒沢のキャンパスに居られ、冒頭に掲げました元平井仏教学部長の抱負は、円
測研究においては、実現されたというべき事です。

さて、これらの仏教学の事実の追及に未校訂のマニスクリプトから始めるとい
う前述の如きコンセ博士から習った方法は、学生の論文指導必要とあいまって、
中国仏教史上の則天武後の研究の為に私を敦煌文書の研究に向かわせました。即
ち1969年の夏、バンクーバーの University of British Columbia に奉職二年目の
私は、ロンドンの大英博物館の敦煌文書の研究に行き、偶然にも矢吹慶輝博士
の、大著[三階教の研究]にもない敦煌文書、Stein 6502番を発見し、急遽解読
し、その秋 American Oriental Society の大会で報告したのち、10年かけて本に
する準備をして居ましたところ、ナポリから同じ敦煌文書にかんする研究が出た
と聞きましたので、せめてイタリア語であって欲しいと祈りましたが、私が一章

を設けた大雲経のインドに於ける背景とイクシュバーグ王朝の宮廷の女性との関係の言及はないものの立派な英語の本で、10年の努力が水泡に帰したクリスマスは本当に苦しみました。しかし、英国の後、パリの国会図書館で、ペリオ将来の慧超往五天竺国伝のコピーをしたのを、「The Hei ch'o Diary : Memior of the Pilgrimage to the Five Regions of India」 ((1984)¹⁸⁾として出せたのは、せめてものことでした。このように、英語で研究発表せぬばならない私は〔佛教学オリンピック版〕といった所です。

B. 思想としての仏教学

20世紀の大事件はキリスト教と仏教の対話であるとトインビーが宣言したそうですが、そう大袈裟に言わないにしても、各宗教の対話が、UBCにおいて私の責任の一つであり、仏教学の1分野に隠れていることは出来ないのです。私の専門はバーバヴィベーカだと云って居られず、博士、修士論文の審査や、各種のゼミとか workshop で、仏教の立場から多くの問題について発言させられるからです。即ち今日世界の宗教が直面している深刻な問題は、1). 聖典理解、2). 世俗化の問題、3). 宗教間の対話であると、石田慶和教授も主張されていますが、¹⁹⁾ 仏教のテキストの確定や個々の文意の理解を超えた真理性をも問わねばならないのです。従ってそれまで聞いたこともなかった hermeneutics (science of interpretation 解釈学) を一夜漬けで勉強して富永仲基の〔加上説〕を发表或したり、〔仏教と肉食に就て〕とか〔聖典と論理〕のゼミで、〔聖典への盲従は宗教の命を枯渇し聖典抜きの論理は空転する〕ことを前掲のnaとnaḥの例で議論するかと思えば、ツルタ、キンヤ博士と佐伯彰一教授の日本文学のゼミで、〔三島由紀夫の豊饒の海における唯識思想〕²⁰⁾を公表するなど少し範囲を拡げ過ぎますが、これらの論文集 Facets of Buddhism として近くインドから出ます。²¹⁾

さて駒沢を震源地として最近、新しい、仏教における有 (dhātu- garbha . 又sv-abhāva vāda) と無 (śūnya-vāda) の対論が熱を発しているようですが、これも、hermeneutics の一大問題でしょう。存在の(有)の空(無)的あり方の解明と、その実践が、かの、Maitreya-chapter の課題であり、仏教の思想的貢献のエッセンスと私は絶えず他と対論しているのです。²²⁾Maitreya が〔yadi bhagavann abhāvasvabhāvaḥ sarvadharmās tadā Bhagavan prajñāpāramitām cavatā bodhisattvena mahāsattvena bodhisattva -śikṣayāṃ śikṣitu kāmena rūpe kathaṃ śikṣitavyam? (袴谷教授の日本語訳によりますと)〔世尊よ、もしもすべての存在(sa-

rva-dharma) が無存在の性質 (abhāvasvabhāva) のものであるなら、世尊よ、知恵の完成 (prajñā-pāramita) について実践し、菩薩の学道 (bodhisattva-sīkṣā) について学ぼうと欲する菩薩大士は、体 (色 rūpa) についてどのように学ぶべきでしょうか?)²³⁾と疑問を發したのも、実に仏教の中心問題が、ここに横たわるからです。世尊は答えて「仮構された物体 (parikalpitaṃ rūpaṃ) であり、これは分別された物体 (vikalpitaṃ rūpaṃ) であり、これはものの本性 (法性としての物体 (dharmata-rūpa) である。]と三性説がとかれているのです。しかも、仮構されたものは無実体ですが、分別されたものは、分別 (vikalpa) なる有実体性 (sa-dravyatā) に基づいたものであるから (rnam par rtog pa rdsas yod pa'i p-hyir) 有実体なものと考察されるべきであるが、しかしそれ自体で起こるものとして (svatantra vṛttitaḥ) 「考察されるべきではない (P. 15) ……」

こうなりますと仏教学専攻でない方には、うやむやになるわけではありますが、これも私は吉蔵の中觀論疏そして安登の Commentary 中論疏記を UBC 仏教学ゼミで研究した時に思ったのでありますが²⁴⁾、このうやむやと言うのは、けっして、うやむやというのではなくて実に、「有耶無耶」即ち何が本当の実体的なものであり何が空 (虚無) なのか? 何が本当の存在であり、そうではないのか。有耶無耶と三論の学僧が白熱の議論をしていたのを、それを回りの人たちが見て、何と坊さんわけの分からないことを言っているのかと、それで有耶無耶という言葉が作られたのだと思いますが、チベットでもちょうど同様のことがありまして、セラ僧院の学僧が「カンサ (=我, gang zag) が有るや、否や」で討論しているのを聞いていた農民が、「そんな争はないで、私のカンサ (キセル, gang zag) をお使い下さい」と。

このように何が sat (有) であり、何が asat (無) であるかはインド哲学及び佛教思想の根本話題として、リグ・ヴェーダの有名な「天地創造の歌」(X 1 2 9) の nāsadāsitya は「その (天地創造の時には) 非有 (asat) も有 (sat) もなかった」と始まっているのです。そして佛教が新しいパラダイムとして提起したものが、縁起の思想、なのであり、この根本思想に対する種々の解釈が佛教の各学派を生ぜしめたので、前回のハンブルグでの ICANUS の国際学会でインド人の学者が、ここらで異った佛教の各学派の説を整理して佛教の根本思想を探し出す必要があるとの提言に対して、貴方は仏教史を勉強しなす必要があると迫った私でした。

勿論、`Granted that the controversies may seem to be a product of `the eloquent Indian mind、which piles on argument to another argument' と申しましたが、私の専門とする Bhāvaviveka の論書を勉強する時にもフッとその不安が頭をかすめる事があるのは否定出来ない事実です。

あまりの彼の精緻な議論に、チャンドラキールティも彼を批判して云う如く… Bhāvaviveka、は論理に淫^{いん}しているのではないか、と思うこともありますが、インド哲学の論理を体現した様なインド人に会いますと、それが杞憂と悟るのも事実であります。実はこれは最近、UBCで出した小冊子であります²⁵⁾ここに機械工学の世界的な権威で、モーディというインド人の学者がいます。ちょうど一緒のパーティで話しをいたしまして、私は非常に感銘を受けたのです。なぜなら、彼は機械工学の世界的権威で、人工衛星から出てくる手などを発明した人で、日本の瀬戸大橋のバイブレーションをコントロール方法とかも発明した人で、日本にも数度来られました。しかし、彼は一切の発明に関して特許を絶対にとらないのです。ですからUBCの総長は、絶えず研究費の心配をしなければならないので、そんなことを言わないで、あなたの発明の特許を早くとって、大学を楽にしてくれと言いますが、そこで彼の言うには、バカバットギターの前述の句を唱え、これは私の義務である。研究して発表することは自分の義務であるから、それによって、即ちその結果によって特許をとってお金を儲けることなんてできないと頑強に言い続けて特許をとらないのです。そこで私が彼に会った時に、もしそれが日本の会社が特許をとってしまったらどうなるのかと質問しましたら、それは自分の関係したことではない。自分はいくまでもバカバットギターのあの精神に従う迄であるところ言いましたので、私も非常に感銘を受けて、やはりそのようにインド哲学の精神は脈々として流れていると思ったのであります。

さて本論の`佛教に於ける有と無の対論、²⁶⁾にもどりますが、否定し得なかった`実体性、への要請は Pudgala vādin の勢力が大であった歴史的事実についても、後世アラヤ識への要請、如来蔵説の興起等の歴史的事実があり、縁起説からの批判と共に学際的考察が必要ではないでせうか。

例えば。日本における国際ペンクラブの大会において、3、4年前でしたか遠藤周作会長がキーノートスピーチで、文学における潜在意識の重要さについて強調されました。又宣伝技術の上では、潜在意識に呼びかけなくてはならないとい

うことは常識であり、それを否定することは、どう言うことなのか、仏教の熟語の背後に隠れて、わかった気にならない対話が必要なのです。この問題について、過去3年間 Franceska Hollander という名のごとくオランダ出身の心理学を専攻した女性の修士論文を指導していますが、William S Waldron 氏が博士論文を執筆中であることを知って安心した所です。²⁷⁾以上、思想としての私の仏教学へのアプローチは、先ず原典校訂から始まり、文献解釈一般の問題にも通じる聖典理解、そしてその成果を学際的、宗教間の対話に迄及ぼすべきであると牛歩のすすみを述べさせて頂きました。²⁸⁾

C. 実践哲学としての仏教学

もう33年も前、今はそのメンバーであるUBCのAクラスのホテルの様な教授クラブの眼前、朝霜のジョージア海峡をバンクーバー港に進む氷川丸のデッキに私はたたずんでいました。希望と不安の目で眺めた半島の突端、ポイントグレイのキャンパスには、アジア関係の講義はただ一つ、日本語そして仏教学に至っては論外でした。日本の面影といえば片隅の小さな和洋折衷の庭のみであり、真ん中の、高さ五メートルの石燈籠のプレークには、〔平和の使徒〕(Apostle of Goodwill Among Nations)、新渡戸稲造(1861~1933) 記念とありました。すなわち今は、日本人観光客で賑うパンフ・スプリングホテルにおける太平洋会議に、日本側理事長として満州権益の正当さ、カリフォルニアの排日移民法の撤去等を、精魂を費して主張された博士は、ブリティッシュコロンビア(B. C.) 州の首都、ヴィクトリアで、10月15日、日本を偲びつつ客死されたのです。時の晩香坡日本国領事石井康氏は一高時代、博士の『衣服哲学、(カーライル著)を中心とする教養講座を開かれ博士に心服したせいもあって、葬儀万端を取り仕切り、東京の日加協会の協賛を得て、大阪製の当時では『日本一高い、石燈籠が製作され海を渡ったのです。しかしそれを市内のスタンレー・パーク(今は日本人観光客で賑う)に安置しようとした所が猛烈な反対に会った挙句、かろうじてUBCの人目につかない片隅におかれたのです。地元の新聞には、「折にふれて、ともしびがつけられる」と報道されたが、その機会もなく、6年後の真珠湾攻撃の暁、石燈籠にはロープで引きずり回された後、港湾要塞地帯になった附近の藪の中に捨て去られたのです。側には三基の海岸砲を中心とする本格的な要塞が築かれ、250名の将兵が守備していたのです。

しかし日本の潜水艦は一度もこの海峡には侵入せず終戦となり、キャンプの跡

は学生寮となったのですが、終戦後数年間も日系人は、カナダ人市民であってもバンクーバーに居住禁止となったのです。(この不法な行為に対し、本1989年カナダ政府は正式に謝罪し、補償金が支払われている最中なのですが ……)。石燈籠は国際聯盟事務次長だった新渡戸博士とジュネーブ時代からの友人であったノーマン・マッケンジー総長の先見の明と決断力によって、大学の内外の強力な反対——即ちアジアからの脅威(すなわち日本)を防御する要塞地帯の跡に、日本の庭園を作ることは歴史の皮肉である一を打ち破って作られた庭園の中に移転され今日に至っているのです。しかし1989年の first quarter の B. C. 州の輸出総額 Ca. \$ 4.5 billion dollars の40%が U.S.A. に、16%が E E C に、3%が其他、そしてライオイズ・シェアの41%が環太平洋圏となった今は、この庭園のある事が「自然、のようになっていて、マッケンジー総長の後ろだてとなって大学側をまとめた美術史担当の親日家、ベニー教授、又地元の日系人の寄付及び東京の日加協会の協力を求めた田辺領事の努力、徳川家正(初代カナダ公使)元公爵の命を受け、東京及び関西の財界から800万円の寄付を仰いだ東光孝子、日加協会事務局長の奔走によって2000万円(今の2億5000万円以上)が集められたことや、1世の造園師、ロイ角氏の施工の事などの蔭の力は知る人もなく、ただ千葉大学園芸学部、森歎之助設計ということだけが、プレークに記されてあるばかりなので、私は何時も歴史的記録の不完全さを痛感させられているのです。

1960年(昭和35年)に完成したばかりの庭園は「何とまばらなガーデンだ」と酷評されたのですが、北米、インドを転々として、1967年に U B C に奉職した私の研究室の窓外の向こうに、一段と風格を加えたニトベ庭園が望めたのも奇しき縁でありました。そして1970年。大阪万博の年、私のゼミでは、「シルクロードと佛教」のテーマを追い、逢かなる彼方に繰り広げられた東西文化交流の原動力。

「思想は、通商の後を追い、

通商は、思想の交流によって栄える」

との原理に、私の目の醒める思いがしたのです。そしてシルクロードを往くキャラバンの駱駝の鈴の音の幻想は、目前の霜の中をゆく日本船の汽笛によって、折からきしみの音の増して来た貿易摩擦の現状、そして環太平洋経済、文化圏の未来像へと変わったのです。そしてゼミに使わして頂いたリンク教授英訳の慧皎のものした「梁の高僧伝」に次から次へと登場するインド及び中央アジアからの学

僧は、インドと中国の「文化協定」によって派遣されたのでも、インド本国のセントラル・ミッションボード（佛教布教伝道本部）からの命令によってでもなく、或は王位継承問題の醜い争いからのがれる如く（安世高の場合）、或は大道弘通の決意に燃へて（竺法護、曇摩難提等）、或は若い時から旅行好きで、各地方の文化風俗などをありのままに観察し（少好遊方 備觀風俗）、地方の方言の知識や異国の言語に通じて（洞曉方語 華戎音義）放浪して歩いて（竺佛念等の場合）自分の「ルーツ」を求めたでもあろう、中央アジア「2世」の僧侶等は、皆個人の意志により、それこそ

海ゆかば 水漬く屍、
山ゆかば 草むす屍
悟りへの道にこそ死なめ
かへりみはせじ

と旅を続け、大海の波が1本1本の大木を岸に打ちあげる如く、1つ1つの聖典、論書を中国にもたらし、翻訳し、その集成が壮大な中国佛教の殿堂となったのでした。しかも彼等の最後は多くの場合、慧皎が好んで表現した如く、「何時、何処で彼が死んだのかは誰も知らない」（後不知所終）のです。その歴史的事実は、北米における日本の留学生の多くも、所謂「留学くずれ」となって「何処で、何をしているかは誰れも知らない」という例も少なくはないことを知るにつけても、一応、教職に「辿りつりた、わが身の幸せに感謝した事でした。

6月、インドへの途次、大阪千里が丘の万博会場でサンヨー館に出会った私は、「この美しい日本現代建築を、ニトベ庭園の前に移築して、アジアセンターにしたら」と、入場を待つ長蛇の列には加わず、出口から忍者もどきに後ろ向きに歩いて入り初対面の西館長に交渉したのでした。時の晩香坡日本総領事、堀信介氏（後、イタリア大使を経、現、パ・リーグ会長）も「お役所ばなれ、した積極的な仕事への意欲のある方で、外務省全体の反対を押し切って私の「奇想」の実現をとり上げられ、BC州とカナダ連邦政府から40万ドルづつ万博基金、経団連から残りの80万ドルの確約もあって、着工の目途が3年ぶりについて、折柄日本のエネルギー資源確保の為世界「遊説」中の田中角栄元総理が、バンクーバー国際空港から、ニトベ庭園近く迄、ヘリコプターで飛来して30分のUBC訪問の時間をしぼり出し、アジアセンターの地鎮式の鍬入れを（ブレイク・グラウンド）して頂いたのは1973年9月の事でした。

しかしインフレとストライキのために、全工費は540万ドルにうなぎ上り、外郭だけ完成したセンターは「開館する前から腐って来た」との非難が数年間私に向けられたのみか、反対勢力の執拗な運動もあって大学当局も一時は、ブルドーザーで未完成の「元サンヨー館」をつぶそうとさへしたのです。本当に建物もそして、私の命も危機一髪だったのです。しかし、オイルショック後、次第にBC州の石炭が日本のエネルギー源としての重要度を増し、それは日本とBC州間の通商の緊密化をもたらし、州政府もアジアセンター完成の重要性を認め、360万ドルの内装費、造園費が出て、1981年6月、日本代表として三笠宮(現、高圓宮)憲仁殿下、大来元外相等が出席され開館式が行われたのでした。其後故大平総理は、環太平洋経済文化圏の理想と、日本のエネルギー源確保の冷厳な現実の為に来加された折ジャパンファンデーション(国際交流基金)を通じてアジアセンターの日本研究に50万ドルの寄付をされたのでその一部で1984年の5月23日から3日間、ニトベ、オーヒラ記念国際日本学会が日米加濠の学界・政府関係の代表、百数十名が集まり、華々しく開催され私の司会した仏教の分科会の日本代表には、駒沢大学のみから、平井・見理・太田の三教授に論文発表して頂き、駒沢・UBC姉妹校への一つの契機になったのでした。又この国際学会の記念事業として、千宗室、裏千家家元の直々の指示によって、アジアセンター内に、和光庵と命名された茶室も寄付され、正面玄関の壁には、元大森総領事の盡力によって、外務省文化事業局の寄贈になる牧進画伯の麗筆によって紅白の梅華がシルクロードに因んだ東西文化交流の華が、「その一華が開けば、つづいて三華、四華、五華がひらき、さらに百千万億の華、ないし無数の華がひらく。それらの華の開くのは、みなその老いたる梅樹の一枝、兩枝ないし無数枝のわざであるが、老いたる梅樹はそれをすこしも誇るところはない」(増谷文雄訳の)道元禅師の正法眼蔵の原文は、

この一華時、よく三華四華五華あり、百華千華万華億華あり、乃至無数あり。これらの華開、みな老梅樹の一枝兩枝無数枝の不可誇なり……。「梅華」

との私の数年にわたる秘かな願いが、華開いたことを知る人は誰れもいないのです。

又センターの右手には、元御巫カナダ大使御夫妻の盡力により故香取正彦「人間国宝」寄贈の「太平洋の鐘」が、元片倉総領事(現アラブ聯合首長国大使)の代に鐘楼が完成し、1986年1月、中曾根元首相が「撞きぞめ」をされ、「鐘な

るは 春の便りぞ 太洋洋」

の一句を残されたのも、今では歴史の一齣となり、高僧伝の中の王権の推移にも似て、最高権力の興亡盛衰に感新たなものがあるのです。ちなみに英国のエリザベス女皇様（私と同期生ならぬ『同年生』）もアジアセンターに来られ拝謁の栄を持ちました。しかし、元鈴木・竹下両首相も夫々オタワ、トロントのサミット出席の途次来晩（香坡）されましたが、鈴木善幸氏が郷土の先輩のニトベ庭園を訪問されずにゴルフに打ち興じられたにつけても、田中元首相の『ヘリコプター訪問』、橋本龍太郎自民党幹事長のアジアセンター訪問、日本研究図書費の寄付等が想起されるのです。しかし、うつろいだ歎くのはゲートも喝破する如く「たゞ無常を歎き、ものごとの『空』をあげつらう人々は憐れむべきである。何故なら限りある命を以て少しでも永遠なるものを創造する所に人生の意義があるのだから。勿論それは、ものごとの『無常』と『常』の二側面を知る事によって可能なことなのだが……」と。

歴史の潮流は、環太平洋文化経済圏へとながれている、と人は言います。このアジアセンター一角が、その一隅を照らすのでありましょうか。この梁の高僧伝を下敷にした実践仏教学ともいえる私の実験にたいして日本国際交流基金から1986年の10年、奨励賞を頂いたことは私の北米仏教学30年のハイライトでした。（ドナルド＝キーン、ライシャワーのは一等賞、私のは二等賞であります。）その時のアクセプトランス・スピーチで『涙を田にせし功を、と島根県浜田市の松原小学校の校歌の一節を歌って、駐車場をアジアセンターにした経験を述べましたが、北米における仏教学の前途も、大きな可能性を秘めていることは間違いないところです。しかし若い国ですから非常に violent な所があります。すべては怒涛のごとく絶えず変りつつあり、『まさか』という事が起きて、一刻の油断もできない事は間違いありません。つい数年前、UBCの総長が内紛に明け暮れる私の所属する宗教学科を大学の経費節減のために他の学科と共に廃止しようとして、まさにナイアガラの滝の一步手前まで行ったのです。契約によれば学科が廃止されるときには、終身雇用であっても契約を解消できるという項目があり、私の十年にわたるアジアセンターにたいする貢献も『ソレハソレ、コレハコレ』なので義理も人情もあったものではありません。半年にわたる私の北米仏教学30年の危機も文学部長の英断によって最後の5分間で救われたのです。幸いB.C.州の景気も上昇し、宗教学科の内紛も収まり総長も交代して新総長は国際協力局を新設するな

ど事態は好転しましたが、あの時ことは今でも夢でうなされます。しかしロビンソン教授が、就職のあてもなく仏教学博士課程を始めたときのことを思えば、一流の大学であれば、仏教学者が一人や二人がいるのは当たり前になったのですから。アジアパシフィック時代における仏教研究の必要さを社会と大学当局に認識させながら、財政逼迫の囲みを破って多くの大学院生と共に、仏教学に生きているのです。従って私は、津田真一博士のように「もしかしたら、大学における仏教学の講座がヨーロッパのように、廃止、縮小されたってよいのかも知れません。極端に言って今日のようなアカデミズムの仏教学は滅びてもよいのかもしれない。しかし仏教という思想は滅びてはいけないと、私は思います」[＊](p.31) と言うような呑気なことを、私は言うておられないのです。[＊]背水の陣を敷いて[＊](しかもその水は世界一広い水なのですから。)

そして、もう何時の間にか還暦を過ぎた私を励ましてくれるのは、前後14年間に渉る西域・インド大旅行を行った法顕が長安を出発したのはすでに60歳をこえていたという事実、戦乱にあけくれ、多くの大衆と共に木の実を食して修学に励んだという道安の流浪の一生、曇無讖に見られる[＊]聖僧のイメージとはまったく異質な、精力に満ちた野性のたくましいエネルギーを[＊](鎌田茂雄)駒沢大学平井ゼミの皆さんと共に刊行せんとするリンク教授英訳の高僧伝出版の為に、原典と英訳との厳密な対照校訂の作業中にひしひしとを感じるものなのです。勿論、この営みが、究極的、勝義的には意義があるのか、ないのかは「人算不如天算」と中国人も云うように私の分別(vikalpa)を超ゆるものですが、

実時^{とき}なくば 去き来の 年もあらなくに 杯をほし 新年^{とし}をむかえん。

勝義無実時 歲月未可計 興君尽余杯 揖讓迎新春

(これはいうまでもなく勝義と世俗の二諦説を歌ったものですが)

と鈴木格禅教授御寄贈の聖僧始め、法具一式で荘厳された、UBC太平洋禅堂ですわる私が、

atro vāco nivartante cittasyāyam agocaraḥ / nivarttate ca saṃkalpo jñāna-
maunaṃ ca jāyate//MHK-Ⅲ.277//

[＊]words stop here:this is not a domain of thought. conception turns back and the silence of knowledge is born. [＊]

In another words,

[＊]Woven man nicht sprechen kanon, darüber muss man schweigwen [＊] 29)

（これはヴィトゲンシュタインの言葉であります。）と著書の一つを結んだ意味が分かったのかも知れません。なぜなら、
 言の葉の 沈みて浮かぶ 真ことの智
 と `思わず `口ずさんだからです。
 御静聴有難うございました。

註

- 1) これは激動の昭和から、未知なる平成への三箇月を研究休暇で在日した折（1988年11月—1989年2月1日）、11月16日駒沢大学仏教学会主催講演会の草稿に加筆したものである。（1989年7月1日記）
- 2) cf.(1)Eugene Watson Burlingame, The Act of Truth (Saccakiriyā):A Hindu Spell and its employment as a psychic motif in Hindu Fiction, *J Journal of the Royal Asiatic Society* 1917, 429-467;(2)W.Norman Brown, `the BASIS for the Hindu Act of truth, *Review of Religion*, Nov.1940,36-45.:(3)Alex Wayman. *J The Hindu Buddhist Rite of Truth—an Interpretation` Studies in Linguistics*, Murray B. Emeneau volume (1968) pp.365-369.:(4)Alex Wayman,Buddhist Insight.(edited by George R. Elder), Motilal Banarsidass,1984,pp.391-397.
- 3)Iida with J. Hirabayashi, *Another Look at the Mādyamika vs. Yogacāra Controversy Concerning Existence and Non-Existence`*, in *The prajñāpāramitā and Related systems : Studies in Honour of Edward Conze*, pp.271-289, University of California, Berkeley, 1977.
 Iida, *Who best can turn the Dharma-cakra?`-a controversy between Wōn'chuk (613-694) and K'uei-chi (633-682)*, *Journal of Indian and Buddhist studies*, 1986, p-p.11-18.
- 4)Edward Conze and Iida Shotaro, *Maitreya's Questions` in the Prajñāpāramitā,`40-Anniversaire de la Fondation de L'Institut de Civilisation Indienne de L'Universit-e de Paris,1967,Mélanges D'Indianisme à la memoire de Louis Renou, Paris 1968,p-p.229-242.*
- 5)袴谷憲昭、「弥勒請問章和訳」、駒沢大学佛教学部論集、6、p p . (1)—(21) ; 210—19c
- 6)長尾雅人、「攝大乘論：和訳と注解」上、講談社、昭57、pp.33—41
- 7)Alex Wayman,Analysis of the Srāvakabhūmi Manuscript (Berkeley,1961)
- 8)平井俊栄、「中国般若思想史研究」（1976東京春秋社）
- 9)UBC Reports vol.35, No.11,May 31,1989,p.l.;Vancouver Sun, Jury 3,1989 (Religion section)
- 10)Chr.Lindtner.ed,MISCELLANEA BUDDHICA Copenhagen 1985,p.12

- 11) 「中観心論」の梵文マニスクリプトが最近 Jiang Zhongxin 教授 (中国アカデミー) から Lindtner 教授におくられた。最近の Bhāvaviveka 或は Bhavya の研究は (英語)
- Eckel, M. D. "Bhāvaviveka and Early Mādhyamika Theories of Language." *Philosophy East and West* (PEW), Vol. 28, No. 3, pp.323-337. 1978
- Eckel, M. D. *A Question of Nihilism. Bhāvaviveka's Response to the Fundamental Problems of Mādhyamika Philosophy*. Unpublished Diss., Harvard University. 1980
- Eckel, M. D. "Bhāvaviveka's Critique of Yogācāra Philosophy in Chapter XXV of the Prajñāpradīpa." *Indiske studier* (IS) S, Lindtner Chr. (ed), pp.25-75. 1985
- Gokhale, V. V. Bahulkar, S. S. "Madhyamakahrdayakārikā Tarkajvālā. Chapter 1." *IS* 5, pp.76-108, 1985
- Lindtner, Chr, "Bhavya's Controversy with the Yogācāra in the Appendix to Prajñāpradīpa, Chapter XXV." *Tibetan and Buddhist Studies. Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Kőrös*. Ligeti. L. (ed.). *Bibliotheca Orientalis Hungarica*, Vol. XXIX/2 Budapest: Akadémiai Kiadó. pp.77-87. 1984
- Lindtner, Chr. "On Bhavya's Madhyamaka-ratnapradīpa" *Indologica Taurinensia* XII, pp.163-184. Publ. 1987.
- Lindtner, Chr. "Bhavya, the Logician." *Golden Jubilee Volceme. The Adyar Library Bulletin* (ALB), Vol. 50, pp.58-84. 1986
- Lindtner, Chr. "Bhavya's Critique of Yogācāra in the Madhyamakaratnapradīpa, Chapter IV." *Buddhist Logic and Epistemology*, B. K. Matilal and R. D. Evans (Eds.), pp.239-263. 1986
- Lopez, D. S. *A Study of Svātantrika* Ithaca, New York 1987.
- Ovarnström, Olle, *Hindu Philosophy in Buddhist Perspective* (The Vedāntatattvaviniścaya Chapter of Bhavya's Madhyamakahrdaya, Kārikā), *Land Studies in African and Asian Studies*, Vol. 4, 1989
- 12) Iida, Reason and Emptiness: A Study in Logic and Mysticism. (Indological Series No. 8, ed. by Dr. Hajime Nakamura), Hokuseido, Tokyo, 1980, pp.
- S. Iida "A Mukung-hwa in Ch'ang -a study of Life and Works of Wōnch'uk" (613-696), with special interest in Tibetan Buddhism. *Proceedings, International Symposium, National Academy of Sciences, Republic of Korea*. pp.225-251
- S. Iida "The Three Stūpas of Ch'ang An", *Papers of the 1st International Conference on Korean Studies*, The Academy of Korean Studies, Seoul, 1979, pp.484-498.
- 13) Daniel Overmyer, Review on STANLEY WEINSTEIN. Buddhism under the T'ang (Cambridge Studies in Chinese History, Literature, and Institutions.) New York: Cambridge University Press, 1987, pp. xiii, 236. \$ 39.50 *American Historical Review*, Jun.,

1988,p.751

- 14)スタンレー ワインシュタイン , 『日本仏教とアメリカ人仏教研究家の接点—「唐代の仏教」の発刊に因んで—』「駒沢大学佛教学部論集」、No.19、昭63年 pp.13—29
- 15)平井俊栄博士の「法華文句の成立に関する研究」及び「法華玄論の註釈的研究」に見られる学界の常識を打破する文献批判等、又吉津宜英（よしひで）教授の厳密な法蔵等の一連の研究（駒、論集10。紀、37、華嚴禪の思想史的研究1985）の範をとりたい。
- 16)J.C Perry&B.L Smith.ed Essays on T'ang Society 中のワインシュタインの論文)
- 17)Antonio Forte, *Political Propaganda and Ideology in China at the end of the Seventh Century, Inquiry into the Nature, Authors,& Functions of the Tun-huang Document S. 6502.followed by Annotated Translation*. Napoli:Istituto Universitario Orientale 1976):
- 18)Iida, ad (with three other scholars) *The Hye Ch'o Diary: Memoir of the Pilgrimage to the Five Regions of India*, Asian Humanities Press 1984,118 Pages 4th Edition,
- 19)石田慶和 , 『理代の神学的課題について』〔龍谷大学論集〕No.433,平成元年3月 , pp. 1—19. Iida, Notes on Buddhist Causation and Tolerance, in *Buddhism and the Modern World*, Dongguk University, Seoul, Korea, 1977, pp. 107—115
- 20)佐伯彰一「評傳・三島由紀夫」(新潮社, 1978) P.246参照
- 21)Iida, "Facets of Buddhism," (*A volume in Buddhist Philosophy Series*), Motilal Banarsidass, New Delhi, 1988 (in press), 250 pages.
- 22)前掲書(註4), p. 18
- 23)前掲書(註5), p. 12
- 24)Leon Hurvitz, S. Iida and Arthur Link, *Early Chinese Buddhism at Sixes and Sevens*, Asian Humanities Press, Berkeley, 1989 (in Press), 230 pages.
- 25)*Toward the Pacific Century*, UBC. 1988, p.23
- 26)S. Iida, "Āgama (Scripture) and Yukti (Reason) in Bhāvaviveka". *Kanakura Festschrift*, October 1966, Heirakuji-Kyoto, Japan, pp.79—76.
S. Iida "The Nature of Saṃvṛti and the Relationship of Paramārtha to it in Svāntarika-Mādhyamika", *The Problem of Two Truths in Buddhism and Vedānta*, ed. by Mervyn sprung, D. Reidel Publishing Company, 1973, pp. 64—77.
- 27)William S.Waldron,"A Comparison of the Ālayavijñāna with Freud's and Jung's Theories of the Unconscious, *Annual Memoirs of the Ōtani University Shin Buddhist Comprehensive Reseakch Inshitite*, 1988, pp. 109—150.
Shūsaku Endō,"Literature and Religion, Especially the role of the Unconscious", *The Voice of the Writef 1984*, Collected Papers of the 47th International P.E.N. congress

- 28) Iida, tr&ed. with N. Donner, *Hindu Buddhist Thought in India*, Hokke Journal, Yokohama, 1980. 286 pages.
- S. Iida contributed the Mahāyāna Buddhism Section, (150 pages) to “An annotated bibliography on Mahāyāna Buddhist Philosophy”, (209 pages) Kenneth Inada, ed. in *Guides to Assian Religions and Philosophy* (7 vols.) ed., the Foreign Area Materials Centre, N.Y., G.K. Hall, 1976.
- Iida, ed. with W. Simmonds, Nichiren, A Buddhist Prophet. Written by Bruno Petzold, Hokke Journal, Yokohama, 1979, 127 pages.
- S. Iida, A Lotus in the Sun (Analysis of the Sōkagakkai), Indian Institute of Advanced Study, Annual Report, Simla, India. *Transactions of the Indian Institute of Advanced Study*, Vol. One, 1965, pp. 57-66.
- Hirabayashi and Iida, “Two Notes on the San.lun (Chinese Mādhyamika) School Concerning Seng-Chaos (374-414. A.D) Life and Works”. *Korean and Asian Religions Traditions*, University of Toronto Press. 1977.
- S. Iida, “700 Years After Nichiren”, in William Nicholls, ed *Modernity and Religion*. Canadian Corporation for Studies in Religion, Monograph Series, 1988.
- S. Iida, “Dogens Lotus”, the Lotus-sūtra and Japanese Culture, ed. by G. Tanabe, University of Hawaii press, 1988.
- Iida, “Toward a Second Look at Visual Mode in Buddhist Tradition”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Tokyo, 1982, pp. (1057)-(1052).
- The Dalai Lama Speaks: Transformation of a Way (colour, 30 minutes) in collaboration with James Beveridge, 1974, Shastri Indo-Canadian Institute, Montreal.
- Iida and Gereth Sparham, *Tsong Kha pa's treatise on Monovijñna and Ālayavijñāna* (Introduction and annotated English translation)
- Iida and Jane Goldstein, *The Descent and Manifestation of Maitreya Buddha*, Numata Tripitaka translation Project, Tokyo, (in press).
- 29) Iida, *Reason and Emptiness: A Study in Logic and Myysticism*. Hokuseido, Tokyo, 320 pages, 1980. p.298